

2026年度
尚綱学院中学校
第 I 期入学試験問題

国語

注意事項

- 1 「はじめ」の合図があるまで問題の表紙を開かないでください。
- 2 決められたらんに受験番号のみを書いてください。
- 3 解答は必ずそれぞれ解答用紙に書いてください。
- 4 次のような場合は、手をあげて監督^{かんとく}の先生に知らせてください。

印刷が見えにくい場合

問題用紙や筆記用具を落としてしまった場合

なにかわからないことがある場合

受験番号

--

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

運動が苦手な「ぼく」（勇哉）は学校の駅伝大会に出たくないのに、足をねんざしたとうそをついたが、本当に足が痛くなり、なかなか治らなかった。整体師の伊勢崎さんに診てもらおうと、皮膚や筋肉の緊張を体が痛みと勘違いしていると言われる。

翌日の朝、少し早起するとぼくは、登校の前に遠回りをして、ひとりで日の出公園に向かった。

*カバヒコに会うためだ。

「楽しいこと」なんてすぐには思いつかなかったけど、カバヒコのことを考えるとちよつと安らいだ気持ちになる。

誰もいない公園に着くと、ぼくはカバヒコのところまでまっすぐ歩いていく。カバヒコがぼくを見て笑ってくれたように思えた。

なんだかまるで、約束して待ち合わせしたみたい。

伊勢崎さんの言うとおり、整体院に一度行ったからってたちまち足の痛みがなくなつたわけじゃない。だけど昨日はぐっすり眠れて、気分がすつきりしていた。

体と話をするって、どうやってやればいいんだろう。

走るのがイヤで、駅伝に出たくなかつたっていうことは、間違いない。

それは体も心も、そして頭だって、みんな同じだったはずだ。

そしてぼくはくじ引きからうまく逃れて、ただ道の端で応援するだけなのに……「イヤなこと」はもう、しなくてよくなったのに。

ほんとは痛くないのに痛いつて、頭はなんで間違えちゃうのかな。

ああ、結局足のことを考えている。意識を飛ばすのって、難しい。

ぼくはカバヒコの前にしゃがみ、カバヒコの後ろの右足を **A** まで

ながら、思わず話しかけた。

「走るのがこんなにイヤなんて、ぼくはほんとに弱虫でダメだな……」すると、「ダメじゃないぞ」と声がした。

びつくりした。

カバヒコが、しゃべった？

あたりを見回すと、いつのまにか、ブランコのそばにスグルくんがいた。

「走るのがイヤだと思うことなんて、ぜんぜんダメじゃない。イヤなものにはイヤだろ」

スグルくんはそう言つて、上着の袖口で鼻水をぬぐつた。何度もそうしているのか、袖口はもう、かぴかぴになっている。

ぼくはしゃがんだままたずねる。

「スグルくんも、本当は走るのイヤなんじゃないの？ 駅伝なんか、出たくないって思わないの？」

うーん、とスグルくんは首を傾けた。

①べつに、イヤじゃないよ」

「でもスグルくん、走るのそんなに得意そうじゃないし……」

「そう、おれ、足遅いんだよなあ」

だよな？ 走るの遅いつてわかつてるのに、どうして平気なんだ？

ぼくはその言葉を飲み込みながらたずねた。

「……だって、みんなが見てる中を走らなきゃいけないんだよ？」

「うん？ ああ、そうだねえ」

スグルくんは、へへへ、と笑つた。

「駅伝、やったことないからさ。おれに番が回ってきたから、まずはやってみるつていう、それだけ。もしかしたら楽しいかもしれないし、やっぱりすぐくつらだけかもしれないし、でもそれつてやらないとわかん

ないじゃん」

それを聞いてぼくは、^②「なんだか息が止まるみたいない思いがした。」

言葉も出さず、動くこともできず、まるでカバヒコと一体になったみたいに固まっていると、スグルくんは急にちよこちよこ足踏みあしぶみをし始めた。

「じゃ、おれ、ここから走っていくから。自主練、自主練。この公園を折り返し地点にしてるんだ。あとで学校でね！」

スグルくんは公園を去っていく。

自主練として、登校のときに遠回りして走ってるんだ。

ひとりで、ランドセルをしょったまま。

^③「やっ、わかった。」

ぼくの体と心が本当にイヤだったのは、走ること自体じゃない。

ただ、みんなにカッコ悪いところを見られるのがイヤだったんだ。

走るのが得意な子たちの中、もしもランナーになってしまったら、ぼくが出たとたん、あつというまにビリになってしまっただろう。

全学年の同じ組の子たちの怒りいかを買い、見ている人たち全員から笑われ、駅伝当日だけじゃなくこれからのぼくの学校生活は絶望的になるだろう。

ぼくの頭は、そう考えたんだ。

だからそんなこと、どうにかして避けなくちゃって。

スグルくんは、そんなことちつとも気にしていない。みんながどう思うかなんて。

他の誰もやりたがらなかったランナーを、文句ひとつ言わず引き受けたスグルくん。

得意じゃなくても、やるからには全力で取り組もうとしているスグルくん。

ぼくが足を引きずっていることに、気がついてくれたスグルくん。

ぼくはスグルくんの強さも優やさしさも、まったくわかっていなかった。

^④「カバヒコに頭を押しつけながら、ぼくはこらえきれずに泣いた。」

涙なみだと一緒に、勝手に言葉がこぼれてくる。

心と体が、カバヒコに聞いてもらおうとしているみたいだった。

「ぼくは……ぼくは、どうやったら自分が駅伝に出なくてすむかってことばかりで……うそをついて……それが思い通りにいったことで、ますます苦しくなって……」

そこで **B** した。

今ぼくは、なんて言った？

ああ、そうか。そういうことなんだ。

体が緊張しているのは、ずるいことしたって罪悪感でびくびくしているからだ。

頭が、間違えちゃったんだ。

ホントのホントは、うそなんてつきたくなかったんだ、そうだ、ぼくは……。

そういう自分のことが、イヤなんだ……。

―― 本文は次のページへ続く ―

次の週、ぼくはまたお母さんと一緒に伊勢崎整体院を訪れた。
伊勢崎さんからの「⑤ふたつの宿題」は、ぼくなりには仕上げてきたつもりだ。

体のバランスを整える体操は、朝、学校に行く前と、夜、お風呂に入ったあとの二回、毎日こなした。

そして「足から意識を飛ばす練習」は、伊勢崎さんの言うとおりの前のことに集中するように心がけた。

びっくりした。意外な効果の連続だった。

たとえば、ごはんを食べるとき、何が入っていて、どんなふうに調理されているかをちよつと注意して見るだけで、前よりもおいしく感じた。歯をみがくとき、歯のことだけを考えていたら一本ずつていねいにブラシを当てようという気になった。授業中、黒板に書かれていることをノートに写すとき、なるべくきれいな字で書くようにしたら内容をすこく覚えやすくなった。

あたりまえのことかもしれない。

でも今までのぼくは、出された食事を特に気に留めずに口に入れていたし、歯磨きなんてささつと適当にブラシをくわえるだけだったし、黒板をろくに見ていないときさえあったのだ。

そしてその「練習」は、そのときだけじゃなく、普段の生活の中で意識が変わっていくことにつながった。

お母さんがいつもどうやって献立を決めているのか想像したり、歯ブラシの形や大きさにいろんな種類があることを知ったり、今まで好きじゃなかった教科にちよつと興味を覚えた。

爪を切るとき自分の指の曲がり方、鉛筆の芯の芯のにおい、傘にあたる雨音。目の前のいろんなことに集中してみると、それまで気がつかなかった発見がたくさんある。そうしているうちに、足のことを気に病む

時間が少しずつ減っていった。

そして伊勢崎さんのところに行くころにはもう、足にとられなくなっていた。あんなに悩んでいたのに、いつのまにか痛みを忘れて、なんだか体がほかほかしていた。

前と同じようにふたりきりになった部屋で、うつぶせのぼくの体に手を当てた伊勢崎さんは「おう」と息をもらした。

「すごいな。一週間でこんなを整えてくるなんて、びっくりしたよ。体のこわばりもずいぶん取れて、やわらかくなってる」

ぼくはうれしくなって、顔だけ伊勢崎さんのほうに向けて得意げに言った。

「ぼくの足、リカバリしましたか」

伊勢崎さんは「ええ？」とちよつと笑ったあと、大きくうなずいた。

「そうだね、リカバリしたよ。お見事だ」

「じゃ、これで元どおりですね」

カバヒコにお礼を言いに行かなくちゃ。

Cしながらベッドの穴に顔をうずめると、伊勢崎さんは穏やかに言った。

「ちよつと違うかな。人間の体はね、回復したあと、前とまったく同じ状態に戻るというわけじゃないんだ」

「えっ」

「病気や怪我をしたっていう、その経験と記憶がつく。体にも心にも頭にもね。回復したあと、前とは違う自分になってるんだよ」

ぼくは戸惑った。

穴から少しだけ顔を抜き、伊勢崎さんにたずねる。

「前とは違うって、良い自分なんですか、悪い自分なんですか」

「それは僕には決められない。ただ、その人が良い方向に行くようにと

願いながら、僕はこの仕事をしてる。少なくとも勇哉くんは、足が痛くなる前にはわからなかったことが、わかってきたんじゃないかな。だから、それをこれから良いほうに活かしていってくれたらいいな」

伊勢崎さんはそれから黙って、ぼくの体をていねいに押し続けた。

ぼくは伊勢崎さんの指を背中に感じながら、ぼんやりと、リカバリーのそのあとのことを考えていた。

(青山美智子『リカバリー・カバヒコ』による。
あおやまみちこ)

なお、問題作成の都合により本文の表記を一部変更した。

【注】

*カバヒコ：日の出公園にあるカバの遊具。治したい怪我や病気の
あるところを触れば治るといいうわさがある。

問1 A C に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|-------|---|------|---|------|
| ア | A | ぐりぐりと | B | どきつと | C | ごそごそ |
| イ | A | ごしごしと | B | ほつと | C | にこにこ |
| ウ | A | すりすり | B | はつと | C | にやにや |
| エ | A | そろそろと | B | ぎよつと | C | はらはら |

問2 ① べつに、イヤじゃないよ とありますが、「スグルくん」がこのように答えたのはなぜですか。その理由を説明した次の文の(Ⅰ)・(Ⅱ)に入る表現を、本文中から指定の字数でぬき出しなさい。

か(Ⅱ 三字) かわからないと考えているから。 (Ⅰ 三字)

駅伝をしたことはないので、やってみないと

問3 ② なんだか息が止まるみたいない感じがした とありますが、このときの「ぼく」の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。

- ア スグルくんも走るのには得意そうではないが、みんなに応援してもらえると信じていることにあきれている。
- イ スグルくんのように、苦手なものでもまずはやってみようとする考え方に初めて触れてびっくりしている。
- ウ 本当は痛くないのに足が痛く感じる自分を、スグルくんは注意しようと考えているのだとあせっている。
- エ 自分のねんぎを信じて何かとかばってくれているスグルくんに本当のことを伝えるべきかと悩んでいる。

問4 ③ やつと、わかった とありますが、何がわかったのですか。くわしく説明しなさい。

問5 ④ カバヒコに頭を押しつけながら、ぼくはこらえきれずに泣いたとありますが、このときの「ぼく」の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。

ア 得意でなくてもまずは前向きにやってみようとするスグルくんとは反対に、苦手なことから逃げていただけの自分を情けなく思っている。

イ スグルくんが自分のことをいつも見守ってくれていたことに気づきもせず、自分のことばかり考えていたことを心から反省している。

ウ 本当は足が痛くないのに痛いとうそをついてしまった自分を、スグルくんだけは信じてくれているとわかり、とてもうれしく思っている。

エ 自分がうそをついたせいでスグルくんが駅伝に出ることになったことを、遠回しに責められているような気がして、申し訳なく思っている。

問6 ⑤ ふたつの宿題 とありますが、どのようなことでしたか。その内容をくわしく説明しなさい。

問7 次の会話文は、この小説を読んだ生徒たちと先生が、「ぼく」の気持ちの変化について話しているものです。(Ⅰ)～(Ⅴ)に入る表現を、本文中から指定の字数でぬき出しなさい。

先生 公園で「ぼく」は、スグルくんが、自分の足が遅いとわかっているのに、駅伝に出るのがイヤではないと聞いて、

(Ⅰ 九字) と不思議に思っていましたね。

生徒A その理由を聞いた「ぼく」はスグルくんと自分の考え方の違いに気づきました。そして、スグルくんの強さと優しさに気づいていなかったことを反省していました。

生徒B そのときに、足は痛くないはずなのに痛いと言が間違えてしまう理由にも気づきました。それはうそをつきたくないのについてしまった、つまり(Ⅱ 五字)をしてしまったという(Ⅲ 三字)があったからでした。

先生 最後の一文に「リカバリーのそのあとのことを考えていた」とありますが、「ぼく」はどのようなことを考えていたのでしょうか。

生徒A おそらく(Ⅳ 十八字)を活かして、これから「ぼく」自身が(Ⅴ 十字)するにはどうすればよいかということだと思えます。

生徒B いろいろなことに気づかせてくれたスグルくんにも、お礼の代わりに何かしたいと考えていたのではないのでしょうか。

第二問 次の各問いに答えなさい。

問1 次の各文において、カタカナの部分に漢字に直し、――線部はその読みを答えなさい。

- ① この宝石には高い力チがある。
- ② キケンな場所には近づかない。
- ③ チヨサク権を守る。
- ④ みんなで退院した友人をカコむ。
- ⑤ 自宅で飲食店をイトナむ。
- ⑥ 畑で根菜類を栽培する。
- ⑦ 計画の実行に支障はない。
- ⑧ ここから先は動物が多い領域だ。
- ⑨ 荒れた土地を耕す。
- ⑩ この文明はとても栄えていた。

問2 次の①・②の各文の主語と述語を、――線部ア〜カからそれぞれ一つずつ選び記号で答えなさい。

- ① 私^アは 昨日^イ 朝^ウに エ^エピアノの オ^オ練習を カ^カした。
- ② ^アとても ^イきれいだ、 ^ウこの ^エ場所から ^オ見える ^カ景色は。

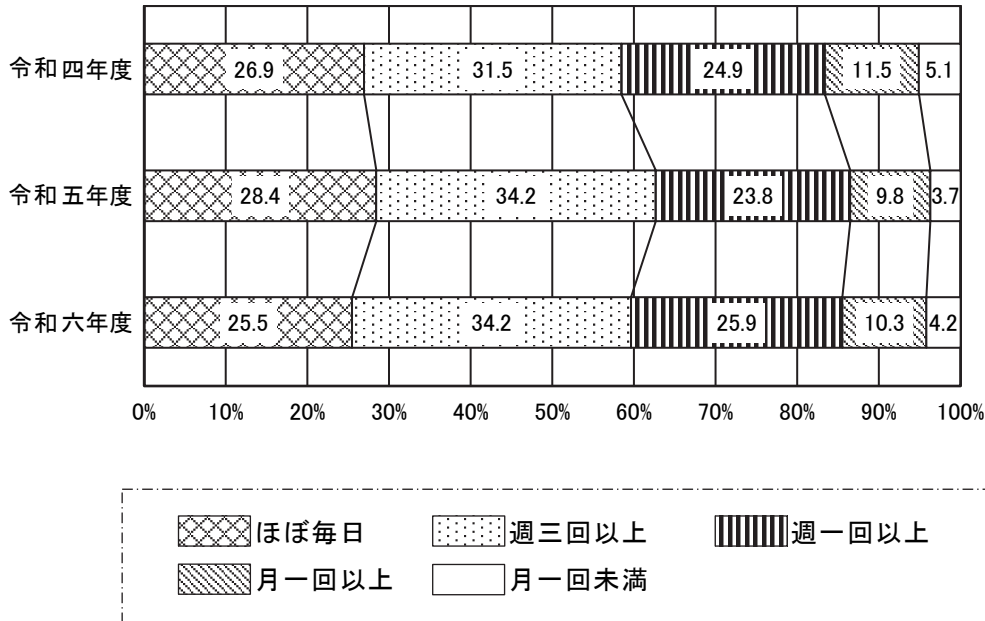
問3 次の①〜③の各組の□に共通して入る漢字一字をそれぞれ考えて答えなさい。

- ① 一心同□ 絶□絶命
- ② 因果□報 臨機□変
- ③ 一□二鳥 電光□火

第三問

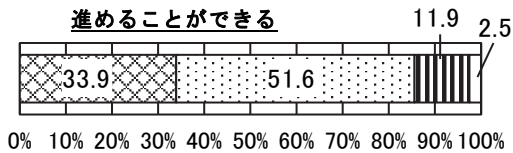
次の資料Ⅰ・Ⅱは、小学生を対象にICT機器（PCやタブレットなど）を活用した学習状況じょうきくじょうを調査したものです。資料を見て、後の問いに答えなさい。

【資料Ⅰ】五年生までに受けた授業で、ICT機器を、どの程度使用しましたか

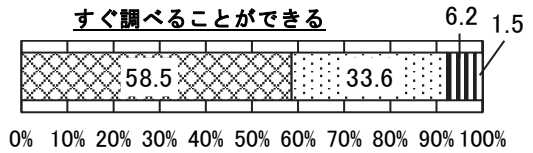


【資料Ⅱ】五年生までの学習の中で、ICT機器を活用することについて、次のことはあなたにどれくらい当てはまりますか

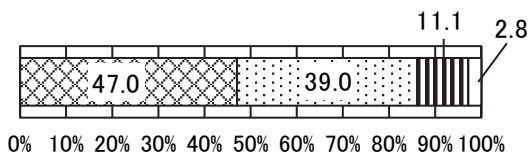
(1) 自分のペースで理解しながら学習を進めることができる



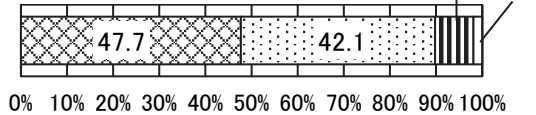
(2) 分からないことがあった時に、すぐ調べることができる



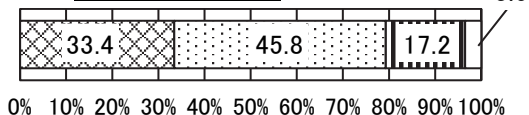
(3) 楽しみながら学習を進めることができる



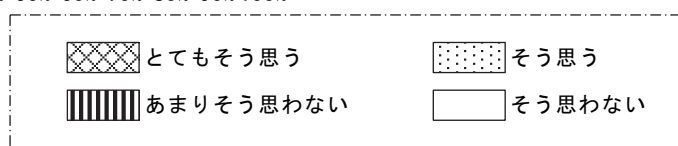
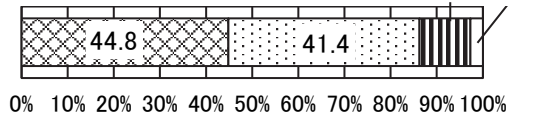
(4) 画像や動画、音声等を活用することで、学習内容がよく分かる



(5) 自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができる



(6) 友だちと考えを共有したり比べたりしやすくなる



文部科学省「令和六年度 全国学力・学習状況調査報告書」より作成
 ※計算の都合上、合計が100%にならない場合があります。

問1 資料から読み取れる内容として正しいものには○、まちがっているものには×をつけなさい。

ア ICT機器の使用の程度は、「ほぼ毎日」「週三回以上」と答えた人の割合の合計が令和四年度から年々増加していて、令和五年度以降は、六割以上の人が「ほぼ毎日」か「週三回以上」使用していると答えている。

イ ICT機器を活用することについての六つの質問の中で、「分からないことがあった時に、すぐ調べることができる」と思っている人の割合が最も多く、「とてもそう思う」「そう思う」と答えた人の割合の合計は九割をこえている。

ウ ICT機器を活用することについての六つの質問の中で、「とてもそう思う」「そう思う」と答えた人の割合の合計が八割を下回る質問はない。

エ ICT機器を活用することについての六つの質問の中で、「そう思う」と答えた人の割合が「とてもそう思う」と答えた人の割合を上回る質問が三つある。

問2 あなたは、ICT機器を活用した学習として、どのような取り組みが効果的だと思いますか。資料Ⅱの(1)～(6)を参考に、自身の体験をふまえて三百字程度で書きなさい。

国語 解答用紙①

※印のらんは、記入しないこと。
句読点はすべて一字に数えること。

受験番号
得点
※

第一問
小計
※
40点

問 1	ウ		3点
問 2	II つ	I 楽	3点×2 (順不同)
問 3	イ	ら	
問 4	3点		
問 5	ア		
問 6	5点		
問 7	5点		

※印のらんは、記入しないこと。
句読点はすべて一字に数えること。

問 1	ウ	3点
問 2	I 楽	3点×2 (順不同)
問 3	イ	
問 4	3点	
問 5	ア	
問 6	5点	
問 7	5点	

身体的バランスを整える体操をすることと、目の前のことに集中して、足から意識を飛ばす練習をすること。

第二問
小計
※
30点

問 1	①	カチ 価値	②	キケン 危険	③	チヨサク 著作	④	カコ(む) 罫
問 2	①	主語 たがや 耕(す)	⑤	イトナ(む) 営	⑥	こんさい 根菜	⑦	ししよう 支障
問 3	①	体	⑨	栄(えて) さか	⑩	りよういき 領域	⑧	りよういき 領域
問 4	②	ア	⑩	栄(えて) さか	⑩	りよういき 領域	⑧	りよういき 領域
問 5	③	応	⑩	栄(えて) さか	⑩	りよういき 領域	⑧	りよういき 領域
問 6	③	石	⑩	栄(えて) さか	⑩	りよういき 領域	⑧	りよういき 領域

2点×15 (問2①②完答)

